

<連載(121)>

世界最大のクルーズ客船 グランド・プリンセスのカリブ海クルーズ

(その3)



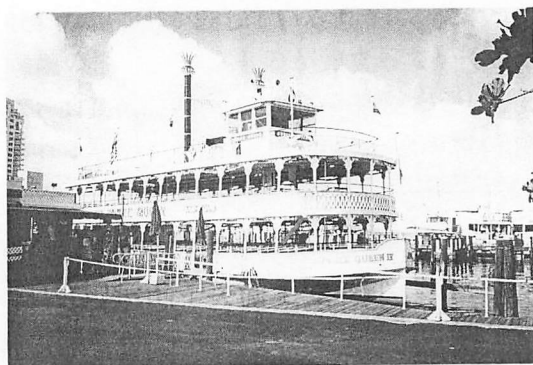
大阪府立大学海洋システム工学科教授

池田 良穂

前回の 本コラムに引き続き、昨年10月に視察した世界最大のクルーズ客船「グランド・プリンセス」のカリブ海クルーズについて報告しておこう。

この視察旅行には国内のフェリー会社、レストラン船運航会社の第一線の方々が4名参加した。これらの会社のトップが、「顧客を感動させてこそサービス業」というポリシーをもっており、本当に成功しているカリブ海の事業を社員にも見せて、日々のサービスレベルの向上に寄与させようという確固たる信念を持っているだけに、参加した人々もなんでも見て参考にしようという意気込みがひしひしと感ぜられる。

乗船する 2日前には、起点港のフォート・ローダーデイルに到着して、エバグレース港(フォート・ローダーデイルの港)やマイアミ港を見学したり、付近のレストラン船事業の視察をしたりした。いろいろなタイプのレストラン船が運航されていたが、筆者らが乗船



ジャングル・クイーン

したのは「ジャングル・クイーン」という遊覧船。パンフレットにはレストラン船で、5時間のディナークルーズで24ドル、邦貨で3000円ほどとある。どんな船かと思っていたが、吹きっさらしの2つの甲板にぎっしりと椅子が並べられているだけの船。

この船で、フォート・ローダーデイルの運河を回り、この会社が経営する陸上のレストラン施設でバーベキュー料理を楽しみ、さらに歌、マジック、踊りからなるエンターテイメントを楽しんで、再び船で戻るといふもの。高級感からは程遠い内容だが、3000円

という値段からするとずいぶんとお買い得感がある。そのせいか、2隻同時運航で、ほぼ満員の600名近くの乗客が乗船していた。レストランで隣になったグループは、おばあさんの誕生パーティを一族集ってやっている。こうした地元の人々にも利用されているのもリーズナブルプライスを実現した結果なのであろう。アメリカの本格的クルーズも個性の違った船を、好みに応じて選べるような状況になっているが、レストラン船でも同じなのかと一寸羨ましくなった。

さて、カリブ海クルーズに乗船した「グランド・プリンセス」に話を戻そう。日曜日の午後2時頃にエバークレース港で同船に乗船した。10万トンを超えるだけあって、とにかくでかい。全長は290m、船幅が36mもある。デッキの数は18層。乗客用キャビン数は1300室で、全部2人で使用した時の乗客数が2600名。パンフレット等には、この数が旅客定員として表示されているが、実際には3~4人部屋として使える部屋がかなりあり、最大旅客定員は3200名余り。2600名を超える人数は、まさに船会社の儲けそのものとなるように料金設定がされている。

中に入ると驚くほど広い。たとえ3000名近く乗船しても、そう窮屈な印象をうけないほどスペーススな方には驚かされる。レストランも様々。リドデッキにあるカフェテリア式のレストラン「ホライゾンコート」は、620席あり、24時間ノンストップで開いてい



グランド・プリンセス

る。この他、同じリドデッキに焼きたてのピザの食べられるピッツェリア、アメリカ人には必須のハンバーガーショップなどがあり、どこでいつ何を食べてもすべて無料である。

この他、スチュワードによるサービスのあつ本格格的ダイニングルームが3ヶ所あり、こちらはそれぞれの乗客にテーブルが割り当てられている。

スポーツ関連では、バレーボールやバスケットのできるセンターコート、ジョギング・トラック、シャッフルボード、バッティング練習場、ゴルフ練習場、ゴルフシミュレータ、ジム、エアロビクス・ルーム、開閉ガラスドーム付海水プール、子供プール、回流プールなど。プールだけでも5つという充実ぶり。

ラウンジ、バーに至っては、トラディショナル・タイプからディスコ調のものまで数知れずといった状況。とにかく大きいことはよいことだ、と言わんばかりにありとあらゆる施設が詰め込まれている。そして、乗客は自分の好みに合せて、そしてその時の気分に合わせて、自由気ままにクルーズを楽しむこと

ができる。これが最近のカリブ海に現われている7万トン以上のメガクルーズ客船の共通した特徴と言える。乗船してみて、はじめてこうした超大型客船が、なぜ驚くほどたくさんの乗客を集めているのが理解できる。それは乗客に楽しみの選択肢をできるだけたくさん与え、それぞれの乗客にそれなりの満足感を与えるように周到に考えられたハードとソフトなのである。

同船のの食事は、毎日テーマを持っているが、イタリア料理がベースとなっている。アメリカのクルーズ客船では、食事の質についてはあまり期待できない船が多いが、この「グランド・プリンセス」の食事はなかなか美味しい。これは、プリンセス・クルーズの創業時から、イタリア系船主との関係が深く、料理人がイタリア系の人が多いからだという。イギリス系のP & O社が親会社であるが、レストラン部門にこのイタリア系の血をしっかりと残したことが乗客には好評のようだ（本当にイギリス料理でなくてよかった！）。毎日のメニューに、必ずパスタ料理が入っているから、肉料理に食傷気味になっても、今日はパスタとサラダだけということもできる。

もうひとつ、大きいことはよいことだという事例を示しておこう。筆者らが乗船してすぐに、カリブ海南部で勢力を強めていた低気圧がハリケーンとなった。昨年秋に中南米で

大きな被害を出したハリケーン・ミッチーである。直撃はしなかったものの、クルーズ前半は、この影響で海は大荒れであった。しかし、10万トンの巨体はほとんど揺れることはなかった。激しく波が船体を打った時に、ブルブルと船体を震わせるものの、運動はあまり感ぜられなかった。船酔いに弱い人には、まさにぴったりの船であり、「大きいことはよいことだ」を実感する航海であった（ただし、筆者自身は少し揺れた方がよかったのですが…）。

この船の唯一の欠点と言え、ショーラウンジが小さく、メインのショーの時に席を確保するのが難しい点であろう。メインのショーは、ダイニングルームでの2回転の食事が終わるのに合わせて2回行われるが、一番大きいシアター型の「ビスタ・ショーラウンジ」の席数が457席。本来であれば、旅客定員の半分の1300席はなくてはならないのだからいかにも狭い。そのため食事が終わるとすぐにこのラウンジに直行して席を確保することとなるが、このラウンジでは飲み物のサービスをしていないから、ショーの開始までひたすら待つだけということになる。ショーは、トークショーもあるが英語がかなり堪能でなければ分からなく、つついとうとしてしまう。ラスベガススタイルのショー、ミュージカルも何回か行われ、こちらはなかなか迫力があって見応えがした。

こうした充実したクルーズで、1週間ク

ルーズが飛行機代も込みで1300ドルからである。カリブ海クルーズにお客が殺到している原因もわかろうというものである。日本におけるクルーズ人口100万人構想も、その中核はこうした海外でのクルーズへの乗客の送り出しということになることは間違いないところであろう。



最後に、ではこのクルーズはどうやって申

し込めばよいのかについてお知らせしておこう。現在では、ほとんどの旅行会社を通して「グランド・プリンセス」をはじめとするプリンセス・クルーズズのクルーズが申し込みめる。また、日本の総代理店をつとめる東京のクルーズ・バケーション社に問い合わせれば、詳しいクルーズの内容等も知ることができる。

新刊書案内 **フェリー・客船情報 '98**

編集：池田良穂（大阪府立大学海洋システム工学科教授） A4版201ページ
写真270枚、船舶図面50枚、発行：船と港編集室、定価：12,800円

旅客船、カーフェリーに関する情報を満載した「客船の年鑑」。旅客船の運航者、建造技術者必携
内容：■客船・フェリー界の最新話題、■客船建造で活躍する造船所（インキャット、三菱下関）
■話題の新造客船紹介、■フェリー会社紹介、■高速カーフェリー視察記、■客船の技術（シーマージン、バリアーフリー、波浪中運動制御、自動係船装置など）、■乗船記（さんふらわああいぼり他）、■新造客船紹介

注文方法：一般書店では扱っていませんので、船と港編集室（〒593-8303 堺市上野芝向ヶ丘町1-23-1-420）までファックス（0722-70-0612）にてお申し込み下さい。